

藝州

嚴

島

圖

會

五





嚴島圖會卷之五

目錄

正月元日御衣獻上

同日御簾捲

同日卯刻御供

同日巳刻御供 同日午刻御供

同日大元御供

二日巳刻兩宮御供

同日大元御供

三日神樂始

同日兩宮御供 同日寶藏院

四日楊枝獻上

同日湯子介始

五日禁裡祈禱 七日七種神樂

同日兩宮御供

同日御弓始

十音御簾下 十六日兩宮御供

十七日管絃講

十八日法花會

廿日百子射 廿五日連歌會

二月朔日仁王會 末日夜祭

初申御祭

酉日御祭

同日法花八講 彼岸講

三月上巳兩宮御供

十二日御簾捲 十四日試樂

U. S. NATIONAL  
DICTIONARY  
S. G. O.  
No. 3640. 10 vols.  
in coll.



十五日夜大宮祭 よあけみやまつり

十六日神能 しんのう

十八日御簾下 みにのろし

廿月八日法花會 かつくさあそび

五月端午御供 たんごごころ

六月八日最勝講 さいしょうこう

十六日夜舟管弦 ふねうげん

七月七日御虫 かみむし

同日両宮御供 十二日夜延年祭 えんねんさい

同夜延年舞 まひ

十六日御洗 かんあらい

九月九日両宮重陽御供 りやうぐうちようやう

十二日新嘗御供 あひちり

十二日大宮祭 ちんだい

十一月申日鎮座祭 ちんざ

十二月八日引声 十二日法花會 廿五日御衣縫 晦日山伏 ひんどうやう じふににち せうしやう せうしやうのまつり せそぬい くれよりやすみ

日別御供 月次御燈 ひべつ じふににちのまつり

孟武林書

西 奇 情  
好 武 器





祭禮并年中行事禱祀故事

○類聚國史

月次祭

曰弘仁二年七月

安藝國佐伯郡速谷神伊都

岐島神並預名神例幣去々

○延喜式

四時祭

曰神祇官所祭之神七百三十七座

奠幣案上神

三百四座安藝國一座去々

案上本書神号を記さんざきども為社ハこの國の一宮也

別絶五尺五色薄絶各一尺倭文一尺木綿二両麻五両庸布一丈

四尺倭文纏刀秋絶三寸

布纏刀秋布三寸

各一口四座置八座置

各一束楯一枚槍鋒一竿弓一張鞆一口鹿角一雙鋤一口酒四升

鰻堅魚各五両腊二升海藻滑海藻雜海菜各六両鹽一升酒坏一

口累葉薦五尺去々

○同書

臨時祭

曰名神之祭二百八十五座速谷神社一座伊都岐



神馬献<sup>しんばけん</sup>上



治承二年十一月ちようしやう  
 内府重盛公ないふしげもりこう  
 当社へ馬を献<sup>けん</sup>ま  
 一ことありこの畠はたけ  
 そのさまをゑかき  
 申<sup>まう</sup>さたり





島神社一座たけ多家神社一座以上安座別絶五尺綿一屯絲一絢五

尺薄絶各一尺木綿二両麻五両累料薦二十枚若有大禱者加絶

五丈五尺以布一端代絲一絢云々

○百練抄曰治兼二年戊戌六月以中宮有身奉幣嚴島

○山槐記曰治兼二年十一月十二日内大臣被奉馬於諸社臨其

時引立西門外侍等相具参向所々云々但大神宮御馬被付在京

之禰宜伊都岐島御馬又付在京神主云々大神宮二足中伊都岐

島一足云々

○百練抄曰治兼三年二月廿四日以安藝國伊都岐島社可加二

十二社之次第祭禮日事等有其沙汰右大臣兼實已下大外記

頼業師尚等預勅問計申之以二月十一月上申日可為祭禮日之

由被定仰先議公卿

○山槐記曰治兼三年二月廿九日被發遣祈年敷奉幣安藝伊都

岐島可令列二十二社之由有沙汰頭中將通親朝臣被仰下去

而猶彼社祭日只可令預官幣之由有議止二十二社列

○同書曰治兼三年三月廿六日被遣伊都岐島奉幣上卿三條大

納言實房弁藏人右少弁光雅藏人中宮大進基親申沙汰之使左

中將重衡朝臣去年中宮御座之時始被立奉幣使同重衡朝臣于

左馬頭御願趣見宣命後聞使翌日下向

陰陽寮

擇申可被遣御幣使於伊都岐島社

三月廿六日甲申

時未二點

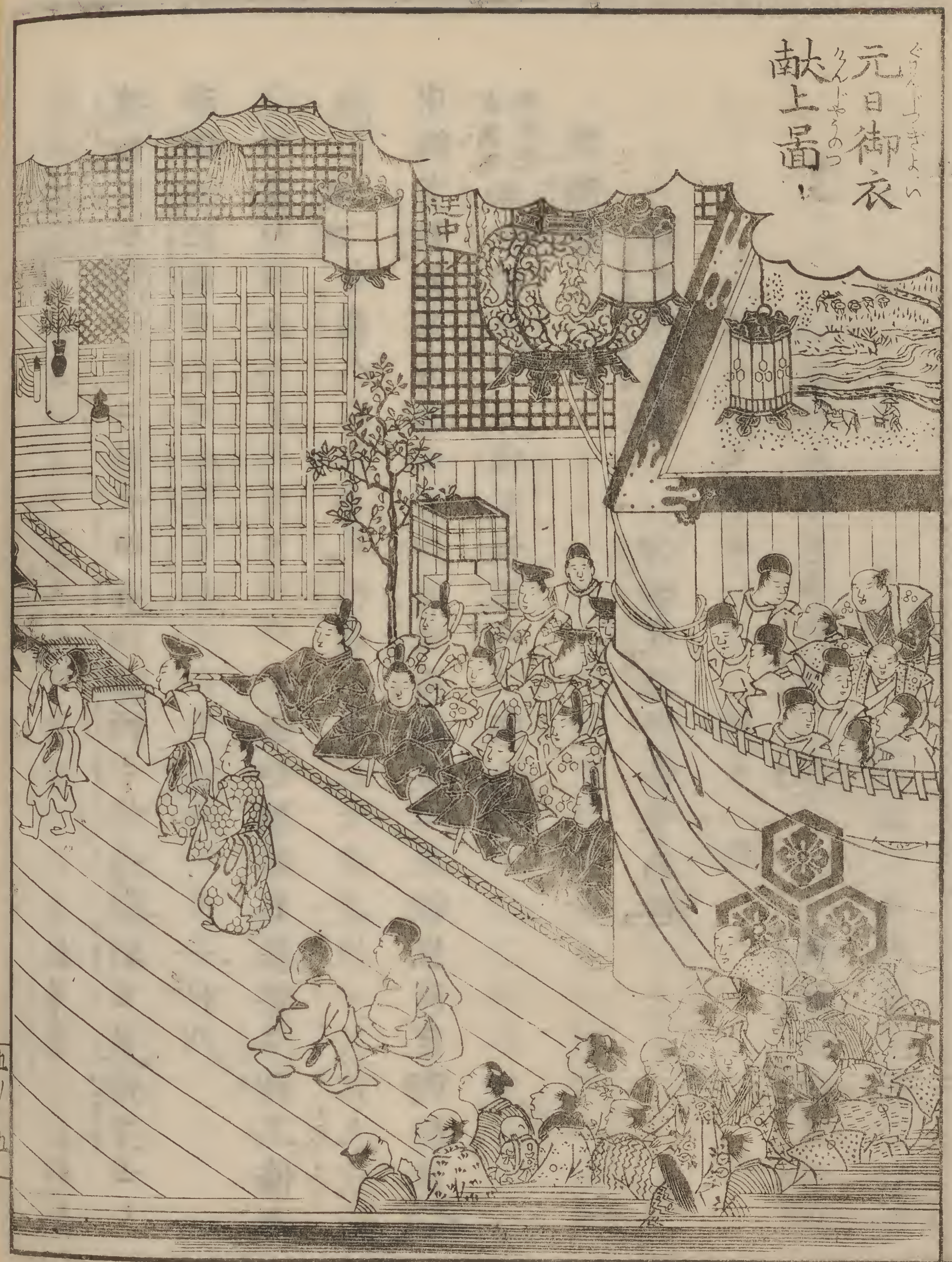
治兼三年三月廿六日

大

属菅野朝臣季長

推漏刻博士菅野朝臣季親





元日御衣  
献上  
畠



奉幣

伊都岐島社使

權

助賀茂朝臣濟兼

左近衛權中將平朝臣重衡

治承三年三月廿六日

天皇我詔旨止掛畏支伊都岐島太神乃廣前爾恐美恐美申給

者人申夫本朝者神國太利振古以降太聖主哲君毛皆依神之

冥助豆專仰國之緝熙久暫以眇身豆天乃日嗣乎傳給倍利夕

惕之思比年序多積礼利爰太神者殊致鎮護於國家廣無靈

眷於民俗苗因茲豆去年獻情乃中尔有思食夏天令祈給布處

尔御意乃任尔相叶倍利是偏神德乃所及奈利其由乎報賽世

免給比兼又殊有所思支始自今年十一月申日天每年乃二季

御祭尔限以永代天幣帛潔妙尔調餽豆可令發遣給奈弥益尔

廣惠美厚御助平令施給倍所思給天奈故是以吉日良辰乎

見定豆正四位下行左近衛權中將兼東宮亮平朝臣重衡乎差

使豆禮代乃御幣仁金銀乃御幣平相副天令捧持豆奉出給布

大神此狀乎平久安久聞召天聖曆惟遙尔御躰又禰尔天皇我

朝廷平宝祚無動久常磐尔堅磐尔夜守日守尔護奉給天北關

之聖坪尔赤松論筆志東闡之璣砌尔香椿獻年天風不鳴條湏

雨無破塊久五穀豐登尔四海愷樂尔護恤給止恐美恐美申給者

止久申

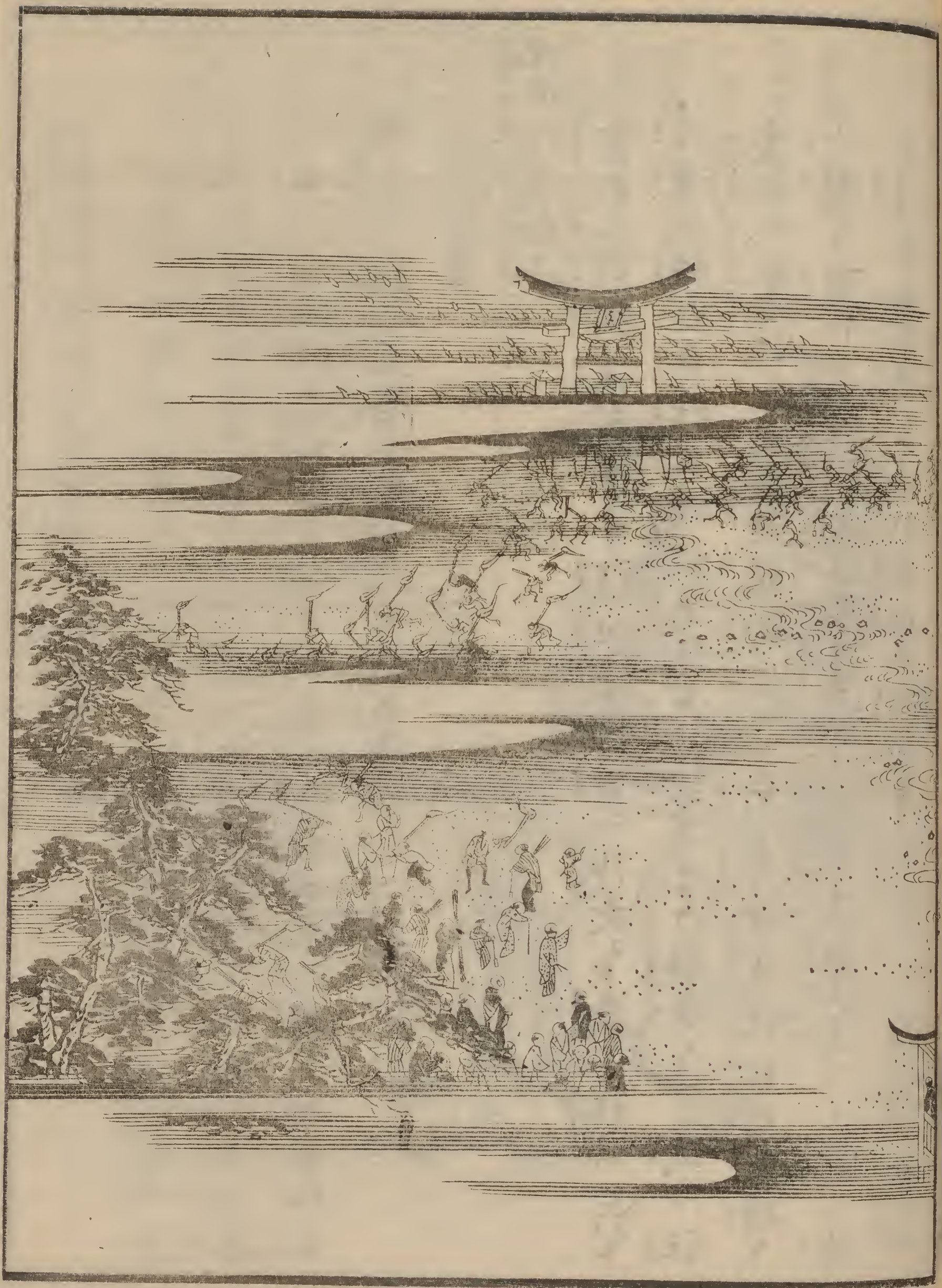
治承三年三月廿六日 大外記業實草之

○東鑑曰文治三年六月三日癸酉去々年平氏討滅之時於長門

國海上宝劍紛失雖被搜求于今不出來猶凝御祈禱仰嚴島神主

安執从景弘以海人依可被索之虜申粮米也早可召仰西海等之





己う  
潮  
迎





旨被宣下仍今日有沙汰可被充催之由

○百練抄曰文治三年七月廿日己未奉幣七社依寶劍御祈也今

日被遣勅使於長門國且被祈謝為令搜索也神祇大副卜部兼衡

大藏少輔安倍恭成等為使前安藝守佐伯景弘去項下向景弘合

戰之時在彼國存寶劍沈没之取云々

正月

元日湯衣献上

寅の上刻鋪設をはうそ浸極守湯前へ湯衣を奉る祝降これを

内陳は納む白綾小地紋龜甲を織たるなり旧衣を裁て社

家中へ配分次○この日拂曉新潮迎とて島俗多くに松明を持ち

小桶を提げ多居の海は群衆多く潮水を汲み入り屋内を襖

ぎ清免身の垢を洗ひ奉社小拝習也

當島は家居

大神の餘沢をもちて

世をけりるちれ清淨

を專とせる事にてとも

若潮迎の初より毎朝は

家より濱辺に出る

潮をく屋内を淨免

後神前よりまうつること

一日も怠らばといひおろは

本朝をへ潮をもて後淨

むることをなるハ桶小門まで



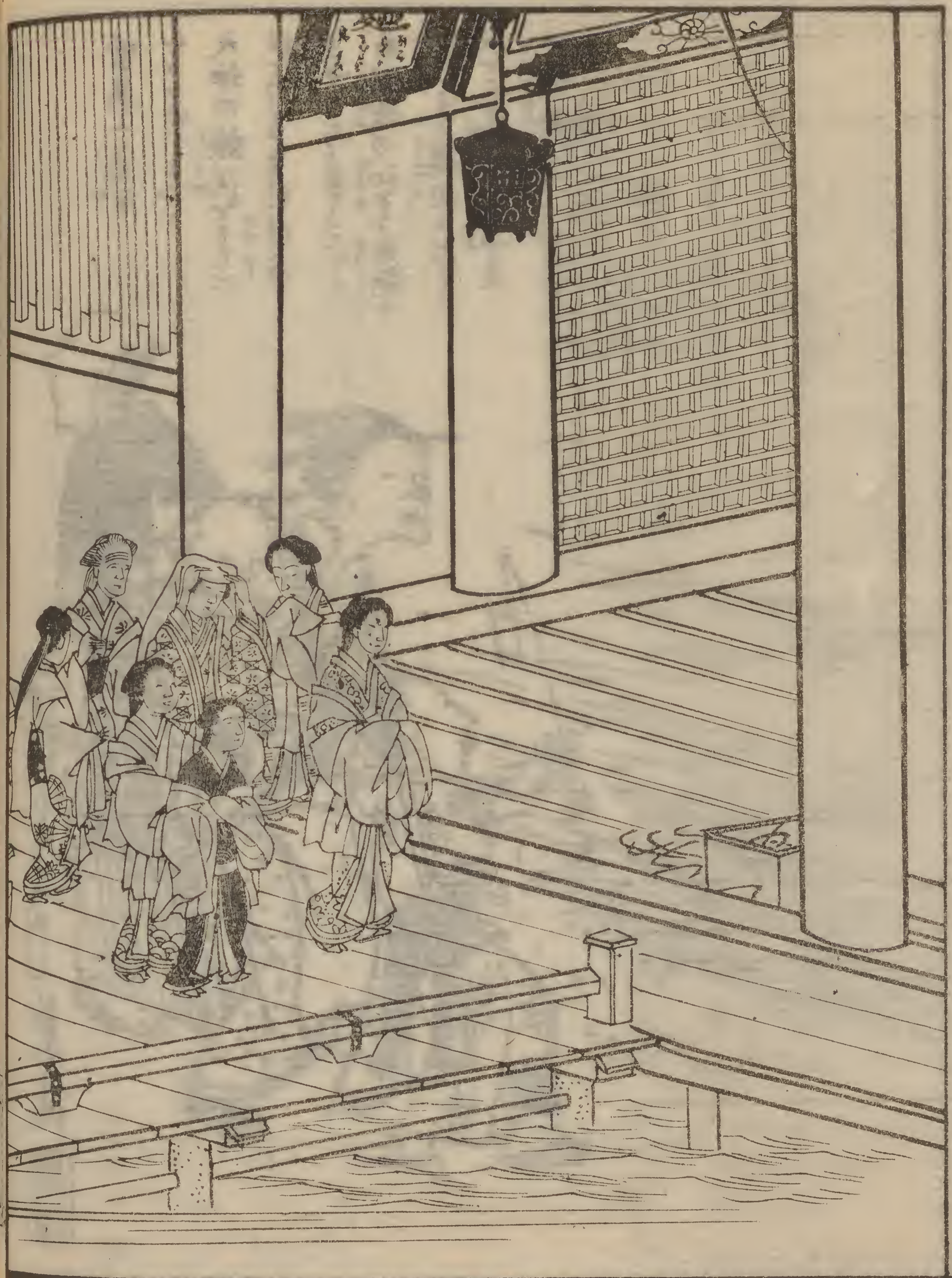
東陵 關陸



内侍  
迎元日より  
三々日迄の事  
みへ手長内侍  
神楽男その家へ  
至迎て神楽の事  
取行元日出と竹林内侍二日と出と徳  
壽内侍三々日出と御子内侍これと本  
内侍といふ外随従とて手長内侍  
といふ



女  
陽





正月五日  
ぶぐくのづ  
舞樂番



いつくしまの  
廣あはれ  
さきさき  
わづ國のそのま  
そやうしふ  
しとむらさきの  
袖くれ  
岡田清

當社の伶人へな天  
王寺方の舞樂校  
ふこと旧例なり然る  
この抜頭いづの  
よりう彼寺小ねた  
えて當社の  
のこりその  
きこといもい宝物  
番會卷一の  
たり當社小ねて  
ふろきゆえあはれ舞  
なれいその番  
まづかろち





同日清簾捲

上件を行ふをけりて諸人の神酒を賜ふまづ両官（西官ハ大史客入官ナリ）の  
 清簾を褰く平日ハ神官の者といへどもその職はけりけりみぢうハ大床  
 昇殿ハ許されどもこの日ハ悉く昇殿をまた雜人も清階のもとまゝ  
 入ふこと成許也

同日外刻清供

清鏡餅清強飯を奉る上ハ祝師出仕この日外史地清前も諸祠  
 官波海しを行ふけりその彼社の下よりけりけり畧次（以下外史の祭式）  
 となす

同日己刻清供

両宮へ伏兔糰餅を奉る社司内侍出仕是國家安全の清祈念なり  
 とて公清供と云ふこの時供僧經座居ふれいゝ大般若經を轉讀し  
 客人宮までハ法花懺法あり梅ハ伏兔ハ和名抄ハ饅飩音部斗亦

伏兔糰餅圖

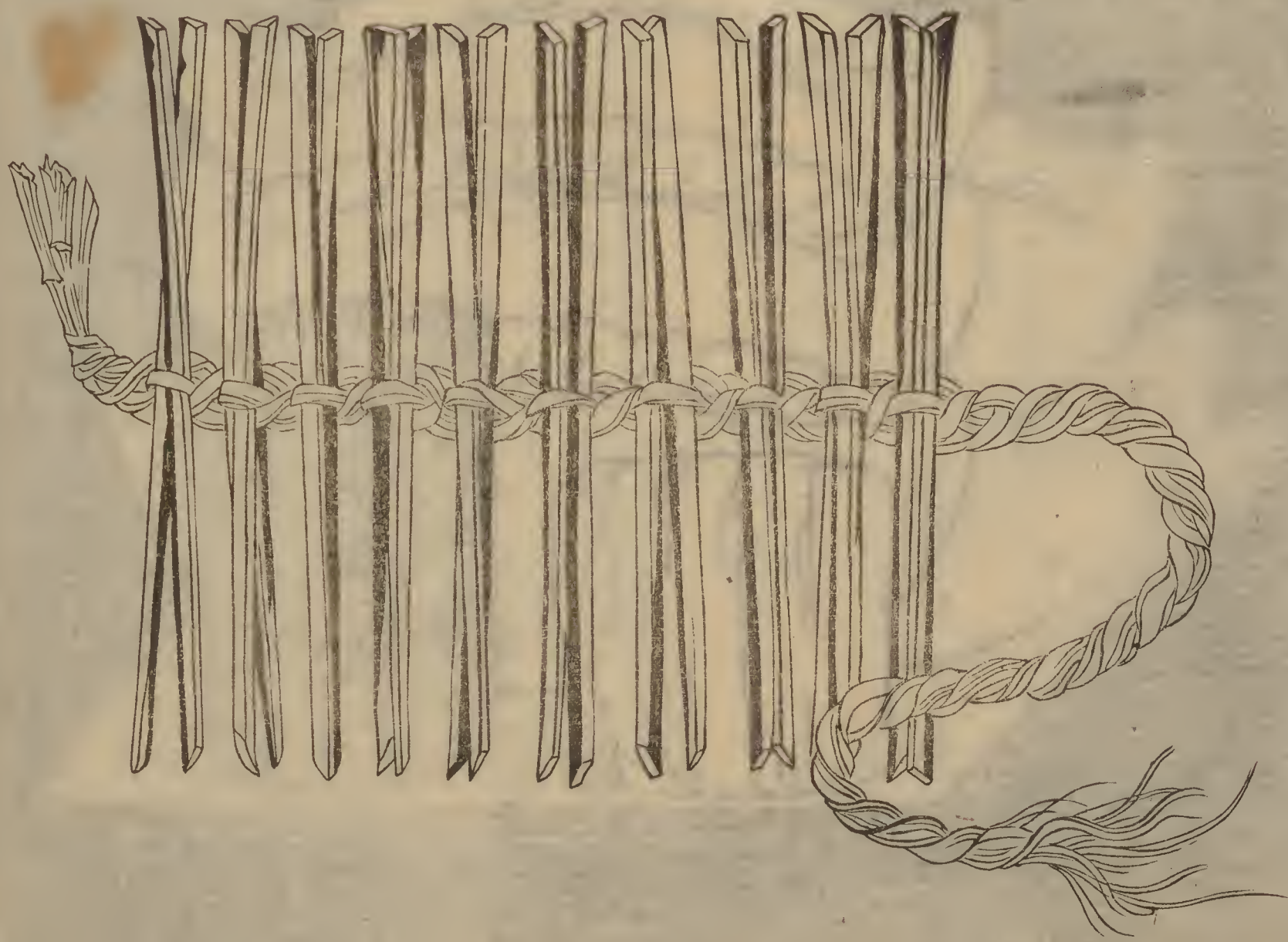
ふともまかりも  
 共ハ餅の名  
 ふてけり餅も  
 のを神おたて  
 まつたことと  
 當社のふあ  
 るに賀茂ハ  
 幡などもふ  
 るくようそろ  
 例ありとなん





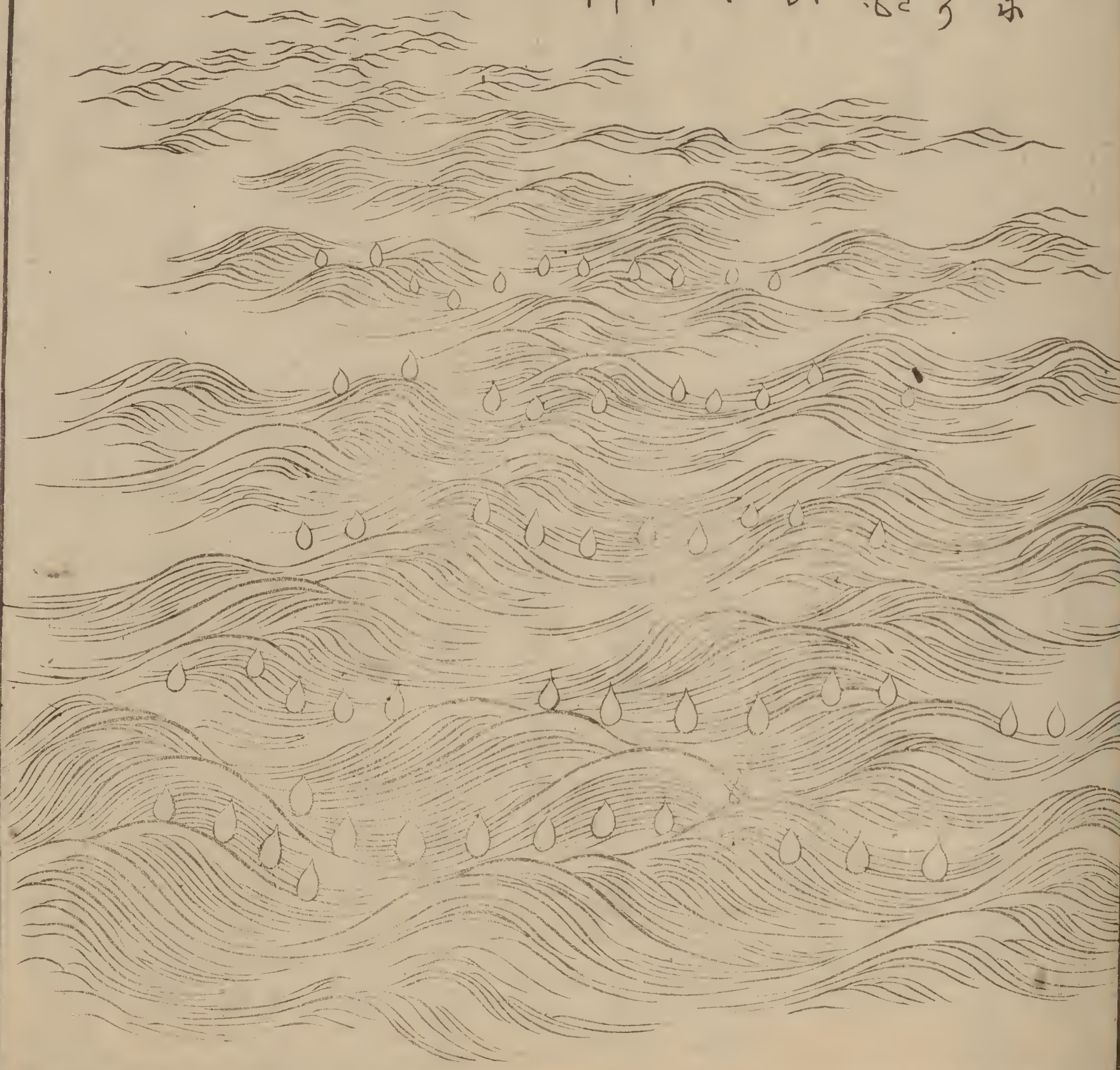
# 楊枝献上面

釈氏要覽いそく 楊枝僧祇律  
 名齒木嚼一頭碎用剔刷牙齒中  
 滯食也毗奈耶云嚼楊枝有五利  
 一口不苦二口不臭三除風四除熱  
 五除痰癢とええて楊枝の利  
 益かくのごとく然るもこれ  
 な佛家の沙汰にして神道乃  
 ち論はあらず當社の楊枝献  
 上も弘法大師弥山を祀りたま  
 ひより以来のことなるべし



# 龍燈

毎年まいねんの正月六日の夜は  
 弥山みせんより臨観りんくわんするなり  
 燈とう長なが夜や宿しゆくこれこを海うみに  
 ありあり怪あやむふたつとといひ  
 まるまるくくい漁まをあや  
 まれるまるるんといふいままも  
 海うみ系けいあるんといふいままも  
 毎まい月げつ日をたぐたををたぐた  
 所ところのそい現げんままへきままへ漁り  
 火ひあるんといふいままも一人ひとりな  
 その実じつを知しるものなるなるぎ  
 んこれ筑紫つくしの不知火しじの  
 たぐひたひひまて奇異きいの甚し一  
 きものちりちり詳しょうは弥山みせん龍  
 燈とう杉すぎの件けんいへり





作糖麴和名布止俗云伏鬼油煎餅名也といひまて環餅といふ抄云  
選云膏環粧揚氏漢語抄云環餅形如藤葛者也和名萬加利云

と足申まて本草綱目の環餅以糖粉和麴麻油煎成以饴食之式以

糖粉和麴入少塩牽紐捻成環釧之形油煎食之故名環餅といふ土

佐日記附注にまかりハ餅なり関東は餅をまかりといふ山崎よりいふ

貝のちりなる餅を油あけしを京都へいふ次といふ云々

同日午刻湯供

月次の神供を奉る以下朔日十六日毎月日一

同日大元湯供

上ハ弔神神男大元社にて行ふ

二日己刻両宮湯供

式元日の如く大宮にて万歳奉延喜楽等の舞あり

同日大元湯供

式元日のごとく

三日神楽始

大元の神前より上ハ神男神女を奏次其後両宮湯前より奏次

同日両宮湯供

式前の如く太平樂物舞胡德楽陵王納蘇利木の舞あり

同日寶藏開

座主棚守出會の上宝庫を開き鏡餅を供ふ

四日楊枝献上

楊枝ハ白箸なり祝師これを両宮に奉る其後一年の月経より

同日湯多谷始

大宮の湯前よりその式あり

五日禁裡湯祈禱

一は天下湯祈禱といふ寅刻上より下諸祠宮内侍未出仕両宮に於て神

楽及び供儀の勤行ありまた振持甘州林哥拔頭還城長慶子の

舞あり

七日大元社七種神楽

同日両宮湯供

同日湯弓始

一は鬼射といふ輪藏の前より鬼的といふをうけこれを射る社家ごと

ごとくお仕祝師これを勒む鬼射ハ鬼射なり甲乙丙の三字を集め





御弓始  
おんゆきはじめ



おんゆだち づ  
湯立の圖

湯立の虚實の分りかたを  
おん神前小盟ひて湯を探  
りその名の爛たると全たとな  
以て判断するに  
應神紀允恭紀  
など小既みん  
たまびつとある  
おん神前小盟ひて湯を探  
りその名の爛たると全たとな  
以て判断するに  
應神紀允恭紀  
など小既みん  
たまびつとある

湯立のかき  
て區訶陀  
智と訓湯  
立といふなり



おん神前小盟ひて湯を探  
りその名の爛たると全たとな  
以て判断するに  
應神紀允恭紀  
など小既みん  
たまびつとある  
おん神前小盟ひて湯を探  
りその名の爛たると全たとな  
以て判断するに  
應神紀允恭紀  
など小既みん  
たまびつとある



おん神前小盟ひて湯を探  
りその名の爛たると全たとな  
以て判断するに  
應神紀允恭紀  
など小既みん  
たまびつとある  
おん神前小盟ひて湯を探  
りその名の爛たると全たとな  
以て判断するに  
應神紀允恭紀  
など小既みん  
たまびつとある



謎字として勝負を争はざる意を表せる年始の祝事なり

十五日法華下

元日は寒けし西宮の法華を無きまこと刻は供奉りし西宮の法  
鏡飾を社家中頂戴まこと加例法禱とて神永湯立木ありこの日供僧  
未開持の法を脩む五月九月も日

十六日西宮法供

以下毎月朔旦十六日

十七日管弦講

一十七夜講と称む大宮法前より於て供僧に後日法華經を誦讀し  
人ハ樂を奏次其則五常樂皇慶太平樂鶏徳樂なり十二月十七日  
ハ客人宮より行へり

十八日法華會

大宮法前より於て講次且來照り伶人出仕し樂を奏次

廿日百々射

大元は於て上はことばをうとむ

廿五日連歌會

天満宮より於て行ふ毎月日一陰徳左平記小義隆ハ嚴島宝前に於て  
多句の連哥與行へきよ一宣るるねのく島は後りたれば山口の連哥  
昨共ハ相伴り嚴島の社人ハ連哥はるもの多しとてども中ふも田の親  
ハ昌休宗養も旧相識なれば席上ハ連りけりと足えそ百韻多句を各  
才三まで載たり今まそ畧きそ多句のそ城阿け當時の盛會を一免次

天正廿年五月九日

浦となくかひてなまの波もな

義隆

この果やち種は白布なる乃花

壽慶

月や々は春ゆくふれとてが祢

宗養

布も屋多うへる雪井のふとぎ次

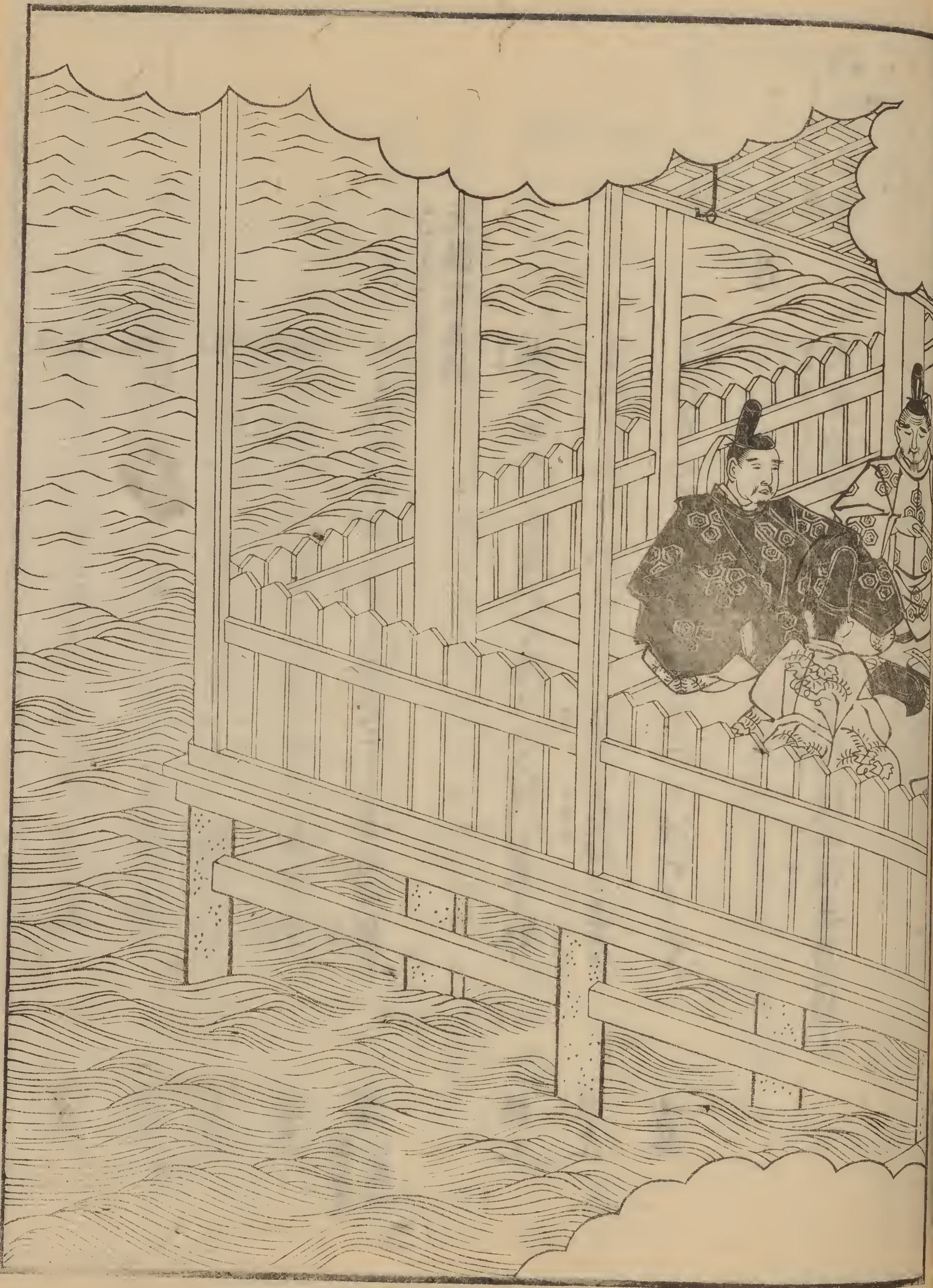
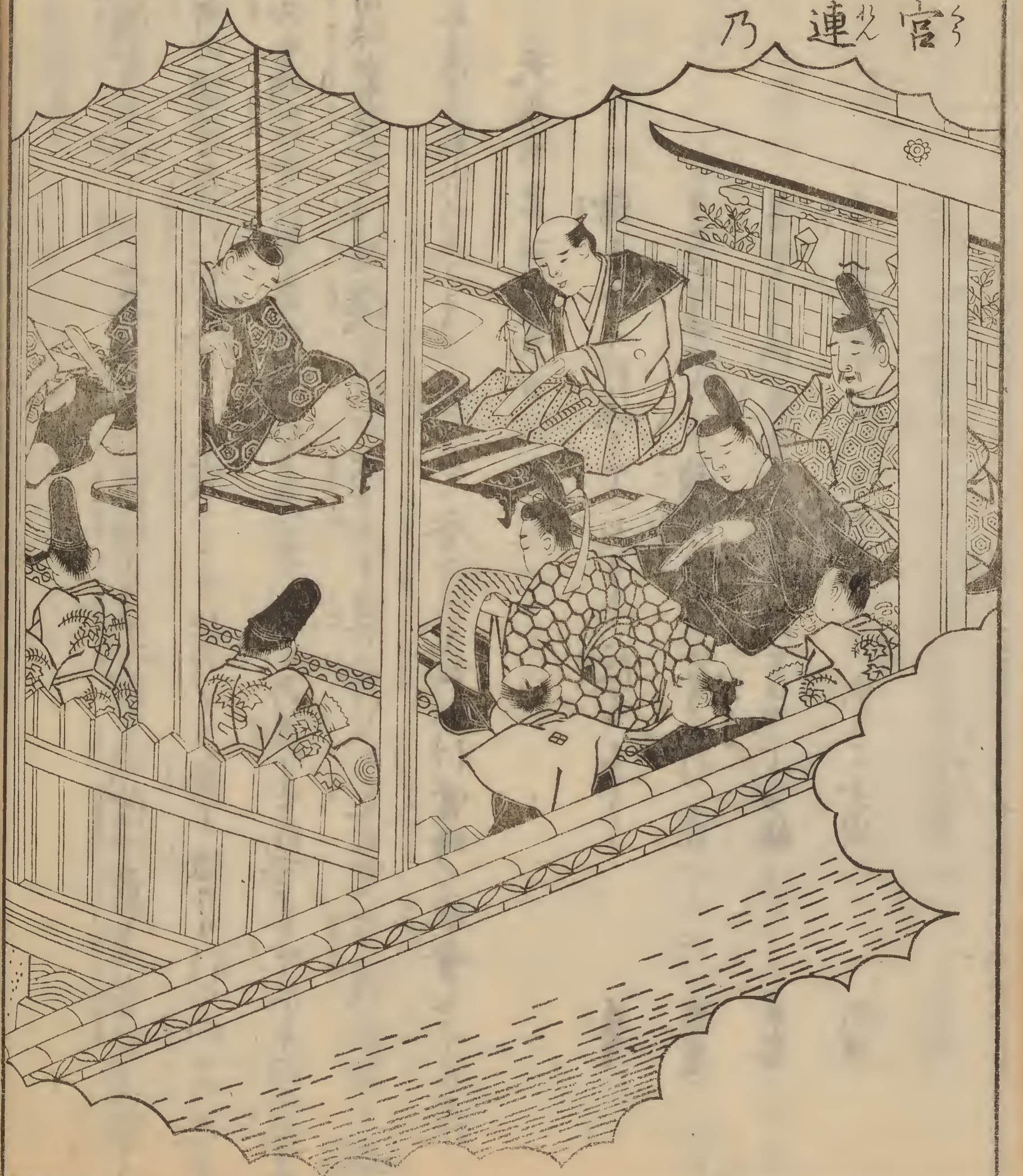
元理

近して婦秋よとて被りあすか

昌休



天<sup>てん</sup>滿<sup>まん</sup>宮<sup>きう</sup>  
毎<sup>まい</sup>月<sup>げつ</sup>連<sup>れん</sup>  
歌<sup>か</sup>會<sup>かい</sup>乃<sup>の</sup>  
圖<sup>ず</sup>





秋とく（バ）ちる葉もう智のやまきう那 怒哲

次第をきむる後やちとよはの月 能祐

申ふ契より板とむも——萩のそ名 底采

嘆こ次りそ海をとちうのう米花 親尊

しもけう（屋）雪もりく——まつて風 蒼 称名院 公條公

天満宮奉納

梅ハ世のそちのそ海——はけろ那 輝元

まつふちああ——ハ秋のそ花そそ 正元

くけああろそ葉やむそこのはの——も 安勝

二月

朔日仁王會 大宮神前より仁王經を誦次以後毎月日

未日夜祭

この祭の義ハ初申の条ハ詳ハあけろ所謂國祭といこれハ初申も——朔日  
にあこれハ正月晦月の夜ハ行ハ

朔日仁王會 大宮神前より仁王經を誦讀を以後毎月日

初申日湯祭

毎年二月十一月初申の日を以てこれをハ鎮座  
祭とハ百鍊抄曰治承三年二月廿四日以安藝國伊都岐島可加

二十二社之次第祭禮日事等有其沙汰右大臣兼實以下大外

記頼業師尚等預勅問計申之以二月十一月上申日可為祭礼式

日之由被定仰とハ此の時より祭礼の式日定り——そそ見えまた

同年三月廿六日中将重衡奉幣使とハ下向ハたまひ——時の湯祭

文ハ始自今年十一月申日 毎年 二季御祭 限以永代 幣

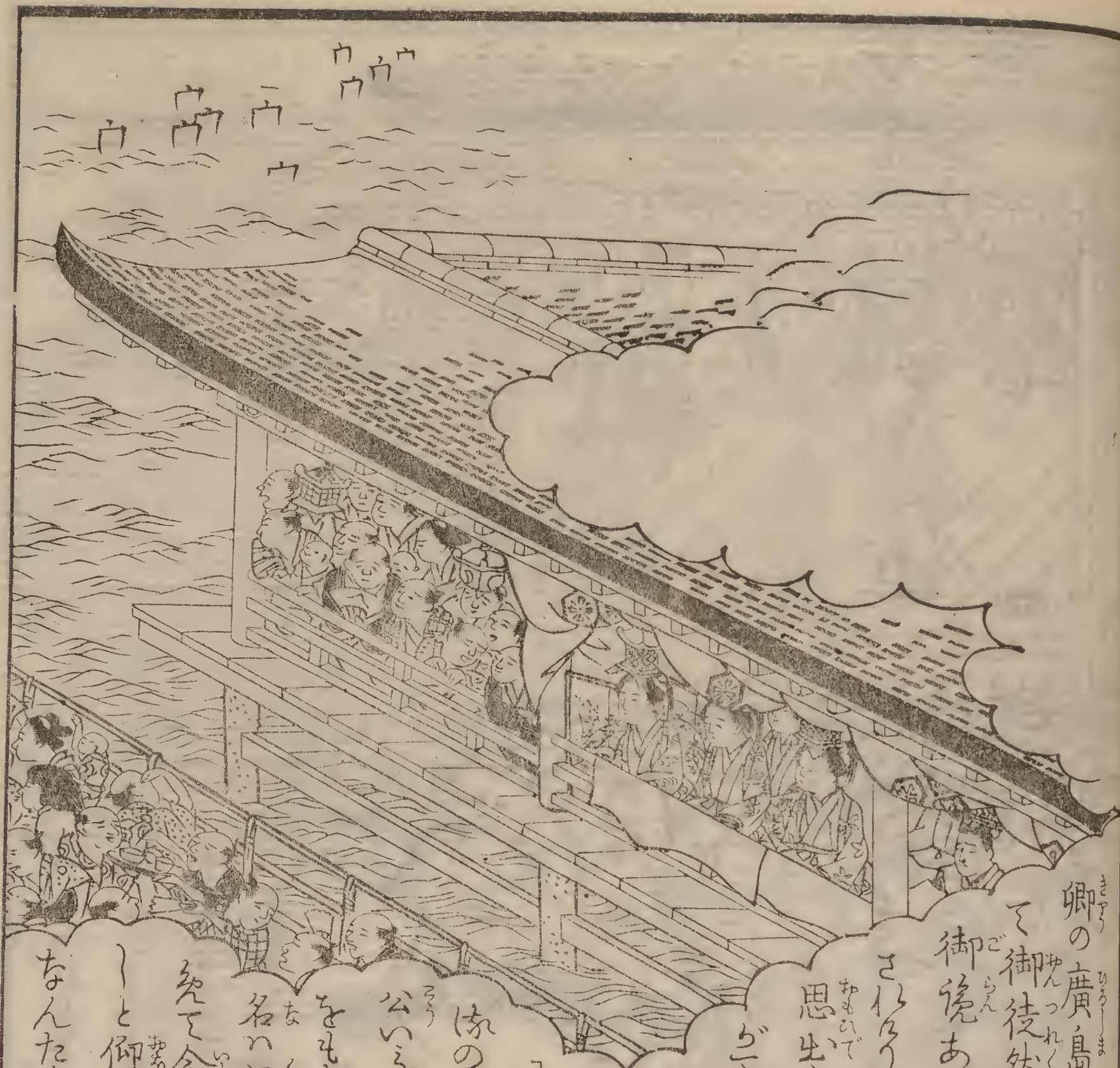
帛潔妙 爾 調飾 天 可令發遣給 祭とハろく二季の上の申ハ祭ハ必む

帛潔妙 爾 調飾 天 可令發遣給 祭とハろく二季の上の申ハ祭ハ必む



能舞臺の圖

今いむろー永享のころ長谷川基能とて武士ありけりそれが子の清藏  
金春太夫といふいづれ猿樂の名人は名簿をたづなり弟子となりて能乃  
まひをなんまねびる家い京都の北山長谷といふところ後までそよ泉あり  
井たこと醴のごと後土清の帝にそい先けよせたまひ幸一たまひ  
一より氏を幸と改免けるをいつのわどより幸の訓を音ふらへて幸と  
なんよびるその後裔幸五郎次郎正能慶長元年の秋故ありて安  
能の園ふぐりこの島の弥山小七日系籠一丹誠をこころて五郎  
枝の妙旨を得せし免たまへと祈りける小七日小みてる夜弥山の鎮  
守三鬼神後中小来りて告たまいく京都小霊場多かるをを家  
むるとかく詣来たる汝が深切の志等果はやそなほ能きはるまよりい  
ま置鞍の一曲成つるなり時しも秋なれい字を紅葉重とつけて  
朝夕たろろ拍ち習せきえたのもしくぞあるべきとなん告たま  
ひる五郎次郎願望の成就をよろこび速く上洛せんとせしとる後  
小將軍旦利茂昭公織田氏小天下の兵権を奪ひきたまひ毛利輝元



卿の廣島の城小通きれたる

て御徒然のわどなり一か一曲

御後あるべしとて屋敷形め

さけり五郎次郎帰洛の後乃

思出も何ゆうこは及んとや

告の始末を委くまう

一上の置鞍を拍け

るふさうでものけき小を

はの空花柳を催も妙曲小

公いづく感いたまひ神の教

なもどくはあふれとぬさかりの

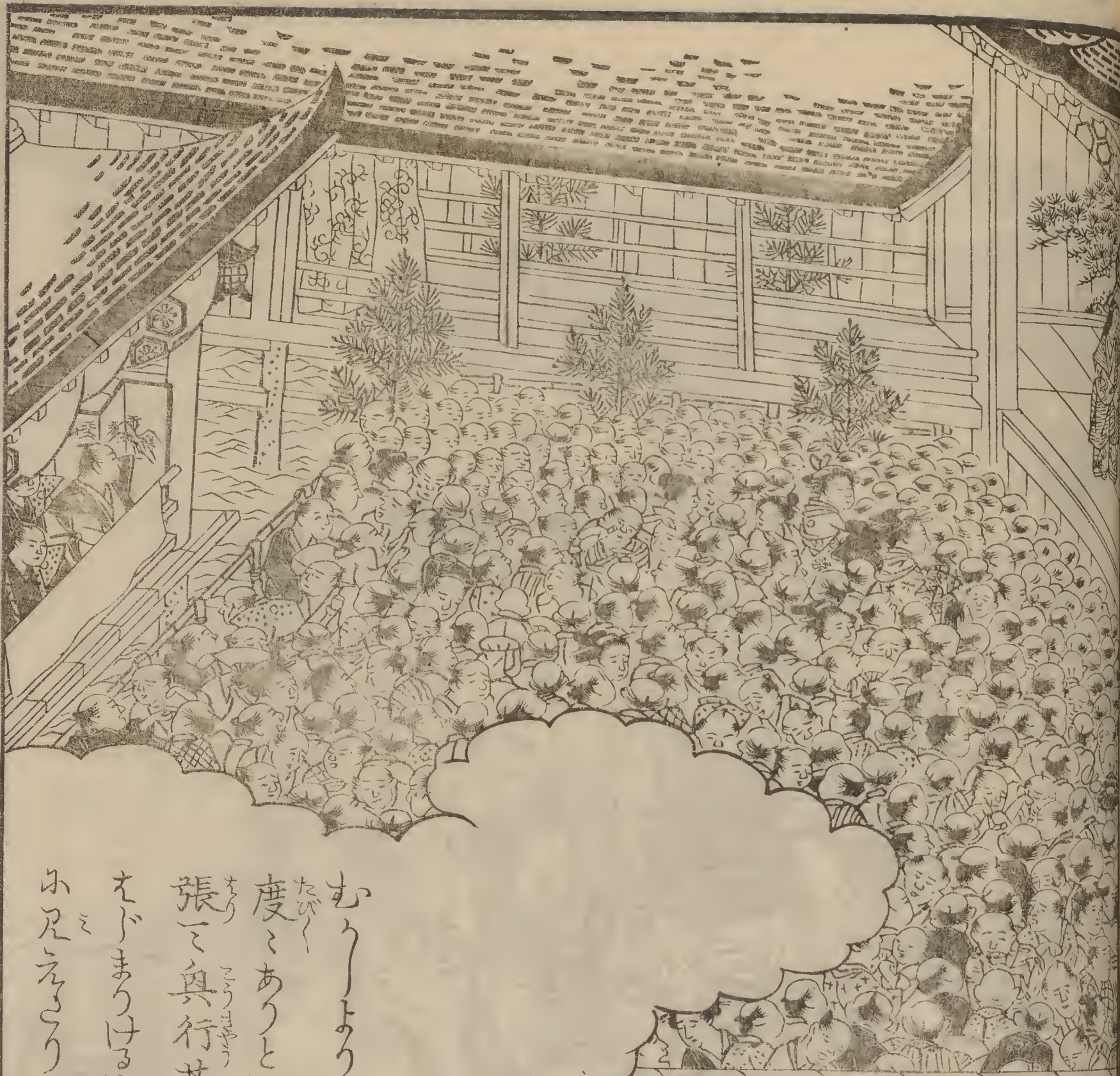
名に惜るるべし花重と改

えて今よりに時ともは用面

一と仰りて紫の調系を

なんたまひる紫のい御免

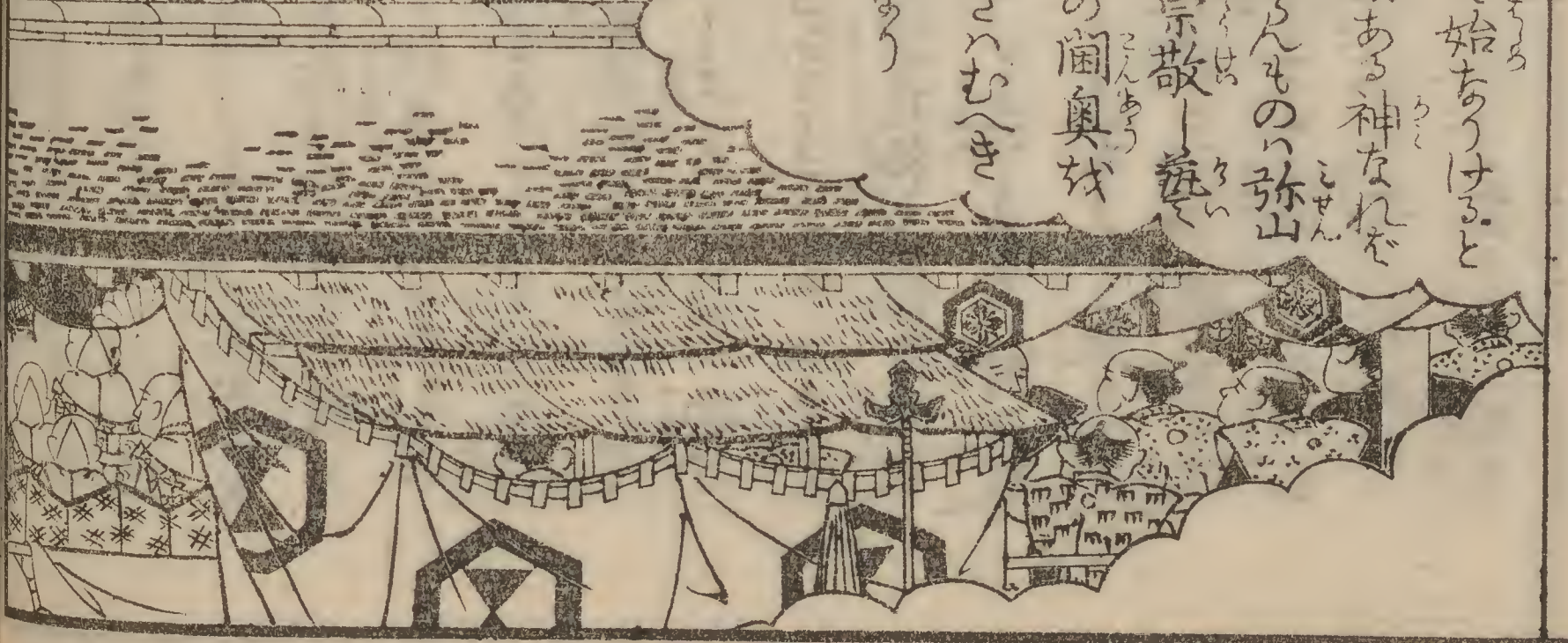




わうよりけりあひあひて名人の能  
度とありといへども江上小舞臺  
張て真行せしこと観世を夫よ  
えりあひけるは 桐守房歌記  
みええり



許いこれぞ始ちうけると  
ぞかるゆゑある神なれど  
斯及志あるもの弥山  
を急ぐ宗敬一巻  
の岡奥  
きいむき  
なり





遊女能を觀<sup>み</sup>る  
出<sup>い</sup>る番





官幣の沙汰ありしより、拾茂抄にも諸社卅二神の内一座  
安執、嚴島是奉幣使之社とあり、但月書に正月下の亥日伊都岐島  
祭被奉官幣使、但近代無其沙汰、欽とあるは、據ればその後故ありて  
たえしや、案、拾茂抄は正月下亥日云々とあるは、この日上に祝師社籠ありて二月の初申生  
て潔斎し、祭をいさむるをいさむるは奉幣使の京都を發するもまはし、け日を  
ふべし、故に上の申日と載し、今、國府の上、田取氏奉幣使代とむるも、  
初申の神より、いさむる中にも、重き祭儀にて、前月亥日より上、  
祝師斎場に入り、田取氏ハ其地ニ在て清まるゝて、はて、末の日夜半  
小至て、両宮ハ、清供を奉る、韓神の寄曲和琴太笛あり、これを國祭  
といふ、この日、祇園官幣社の初官、散米幣帛敷布を奉る、また上、  
田取氏ハ、属官を率ひて、渡海し、昭浦ニ着て、舟ながし、時刻をま  
つ、雉子一羽及び、雜餉料を贈る、申日の夜半より、諸初官大官  
は會し、人を、國府上へを、送し、む使士、度半より、及んで、舟より、

先驅の者、松明を、兼り、伶人、乱声を、吹て、これを、奉祀社殿より、諸  
祠官、こは會し、祝師を、幣の儀を、勅免、祝詞を、奉る、客人、坐の、清  
前まで、奉幣代、祝師二人、拂舞を、なす、國府の、初官人、長の、舞を、な  
し、また、拂舞、明子の、寄曲を、うゝ、其他、万歳、延喜、其州、林  
哥木、の、舞あり、俗に、この、日を、山に、開と、いふ、今日より、十一月、鎮坐祭  
まで、樵夫、山に入り、を、許る、せむ、なり、また、御島、廻りも、今日より、始り  
て、十一月、は、終る、なり、

酉日、清祭、初申の、翌日、山王社より、是を行ふ、上に、祝師、兩、擧、出仕、拂舞あり  
同日、法華八講、供僧、大宮より、是を行ふ、十一月、同日、  
彼岸講、両宮及び、本地堂より、行ふ、八月、同日、

三月

上乙酉、清供



十二日 法華經

此日祝師兩宮の法華經を授く

十四日 試楽

此日整十五日祭の楽を試む陸王納曾利未あり

十五日夜大宮祭

此夜諸祠宮大宮よお仕座し供僧客人宮よ着坐大宮より振鈴をまひ後衆僧を逐ふ多向乐頼利吉の乐あり衆僧客人より大宮板殿に至り曼荼羅供を行ひ柳花を佛階の下に奉るまゝ十天樂萬歳乐延喜乐散々貴徳乐陵王納曾利の舞乐あり

十六日 法乐神能

此日より十八日まで三日の間法能舞臺に於て猿乐あり府下并に島内の能役者これを勤む舞臺共潮水のうへありて四方衆觀の者堵の如し殊に新町の倡妓へ名競て衣服の美をうとしこれより永祿のころは舞臺にて奥行せし番組より夫親世三

十郎同大友夫京節服觀世橘右衛門同福王甚右衛門笛春日市右衛門同延命甚右衛門小鼓幸五郎次郎同下村新十郎大鼓三谷三助同堀助乃郎同萩野左馬助左鼓三谷弥三郎なと弓八幡二人静松虫平堵婆小町融籠左鼓西王母高砂を舞ひしこと同記より見たり中にも高砂の聖護院佛主の佛所とそいひたりなり

四月

十二日は寒けし兩宮の法華經を垂る

八日 法華會

本地堂に於いて奉尊を安置し法花誦讀伶人奏樂あり

五月

端午 佛供

兩宮に菖蒲を奉る

六月

八日 最勝講



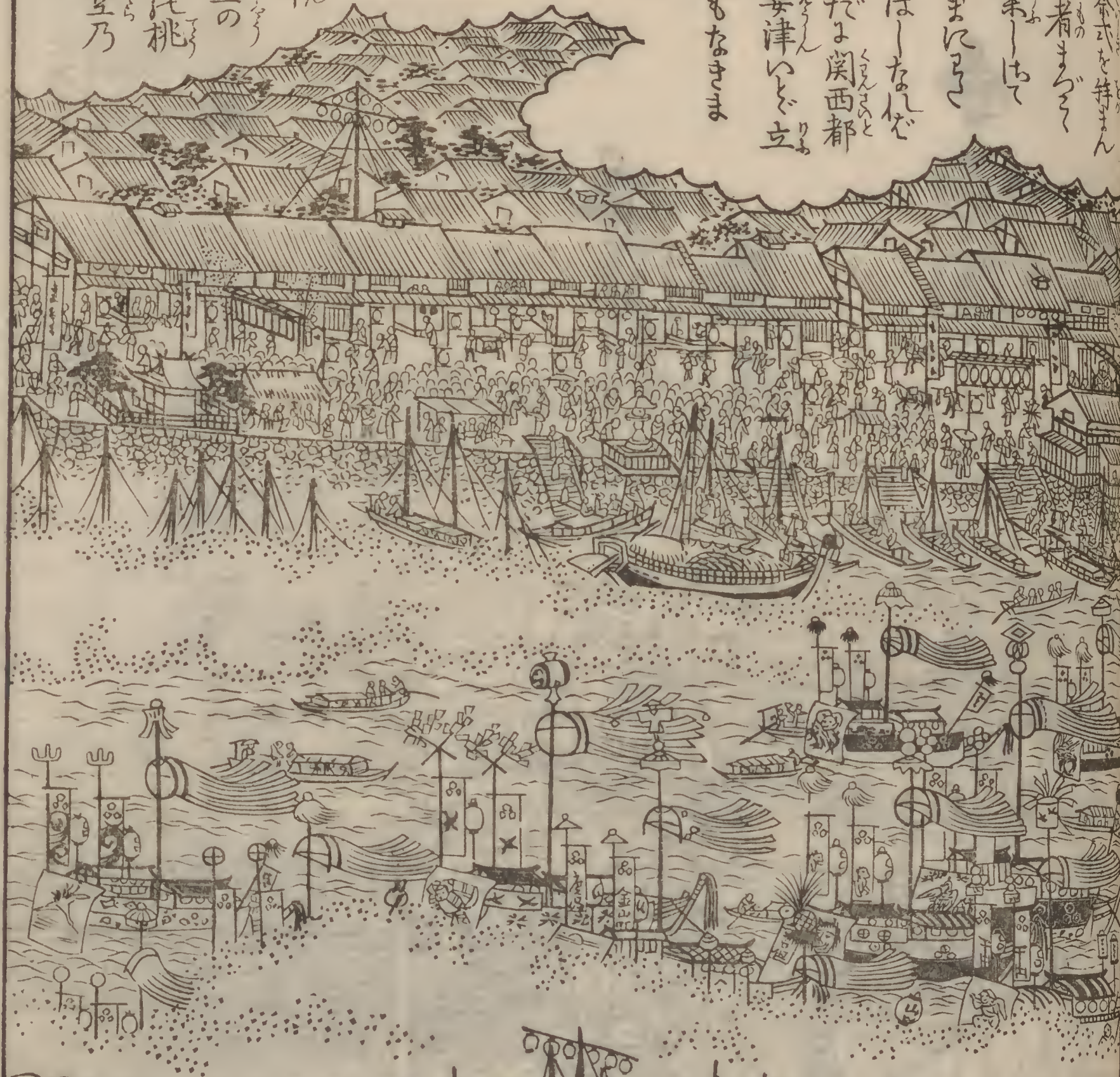
六月十六夜廣島本川口の圖

今夜は大明神地の御前より東還幸此  
 供奉のたえとて町よりたてまつる取  
 乃船京橋川本安川猿猴川平田  
 屋川など便お陸ひて飢といひ  
 母殊ふこれ本川ふてもも多  
 くし潮小競ひ月小うう水  
 門をこたひてそそれよおひ浪  
 義の暮祭もわがぐく次舳  
 艦の錦繡水おろろけい金龍  
 此遊ぐりと疑い  
 鉦鼓の祇園囃  
 子浪おひく  
 龍宮の樂々  
 あやふは都  
 鄙の昔後耳目  
 城よりこぼれめ  
 るいなり大抵十七



夜の祭式を待まん  
 とほ者まづ  
 小群集はて  
 いづまに  
 るちうはーなん  
 けでたは関西都  
 會の要津い立  
 錐の地もなさま  
 でこみ

あひ  
 置  
 さいを  
 中々  
 ろろよ  
 て両岸  
 の樓水上の  
 舟数千桃  
 燈に大空乃



清光を奪たり  
 或ハ心大の立愛  
 小喉をひや一裁  
 後縮の行むり  
 小胸をひく  
 次る橋上の里  
 音ハ雷もところ松  
 譲る一浩哥酣  
 飲たきり登乃  
 暑をわめん  
 誰う夜の閑を  
 知らんまこと  
 が廣島の一大壯  
 観なり



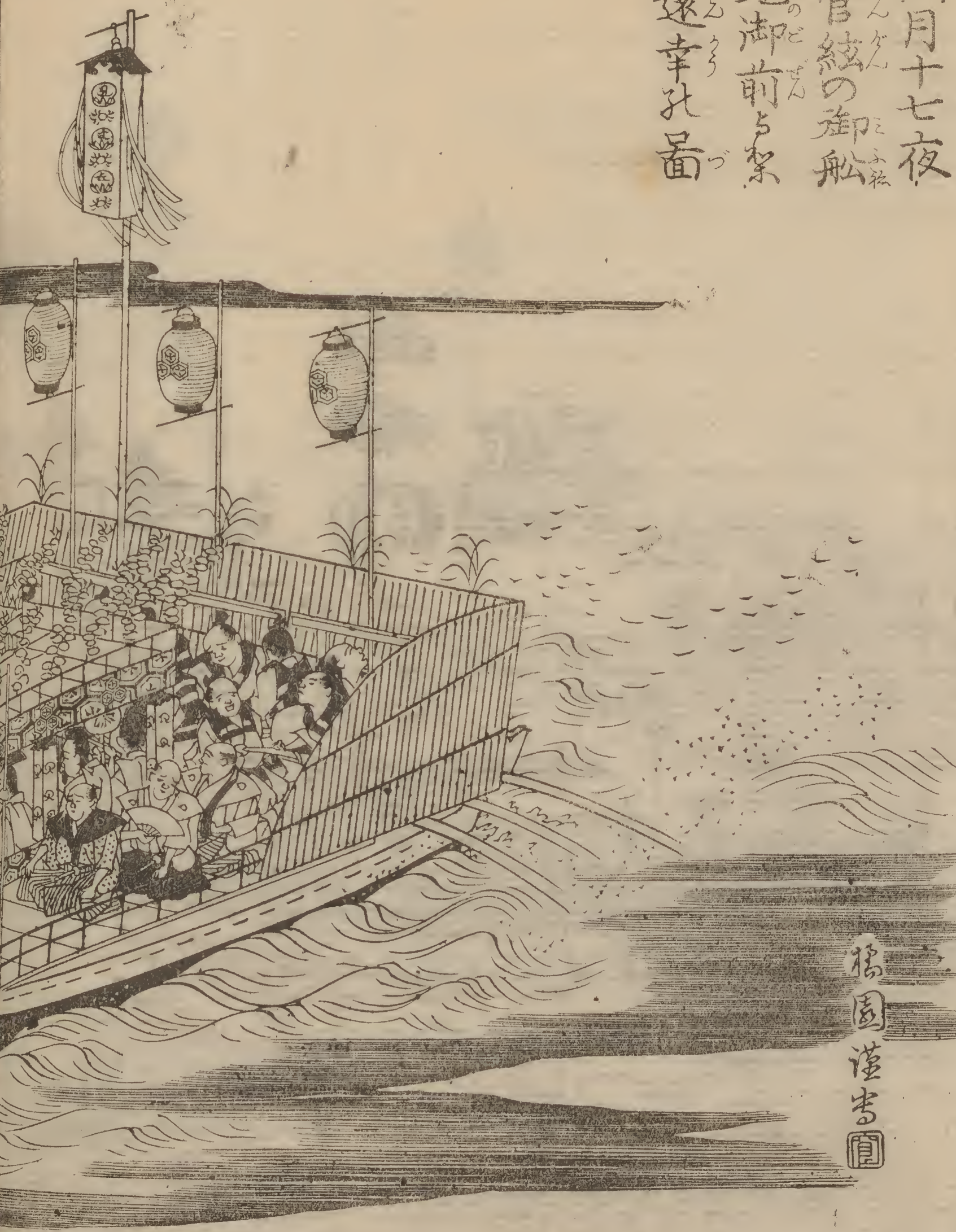
せんともふ孫うの  
 御供船川  
 めい  
 口を出る番

早





六月十七夜  
 管絃の御船  
 地御前と衆  
 還幸此番

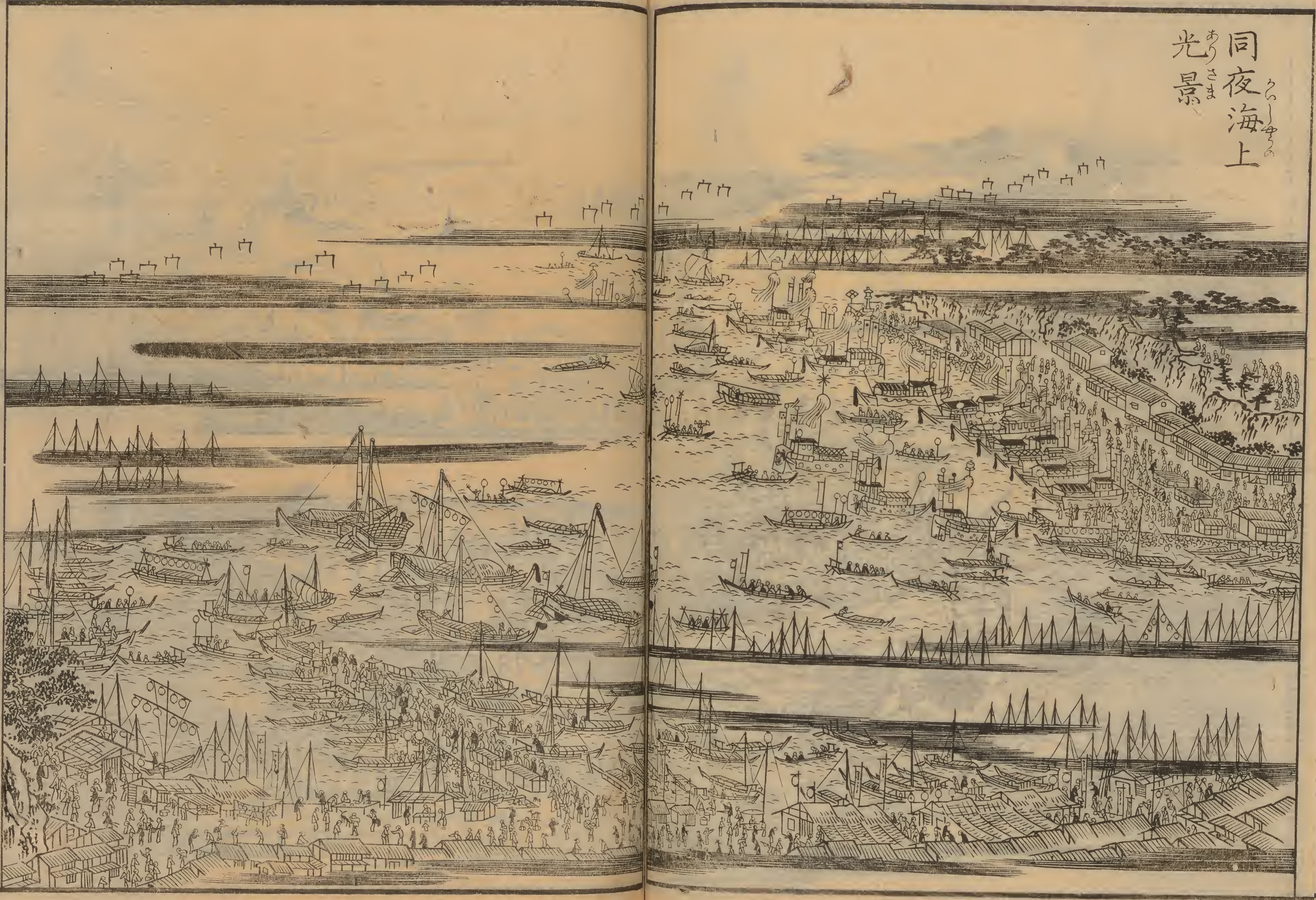


楊國漢書

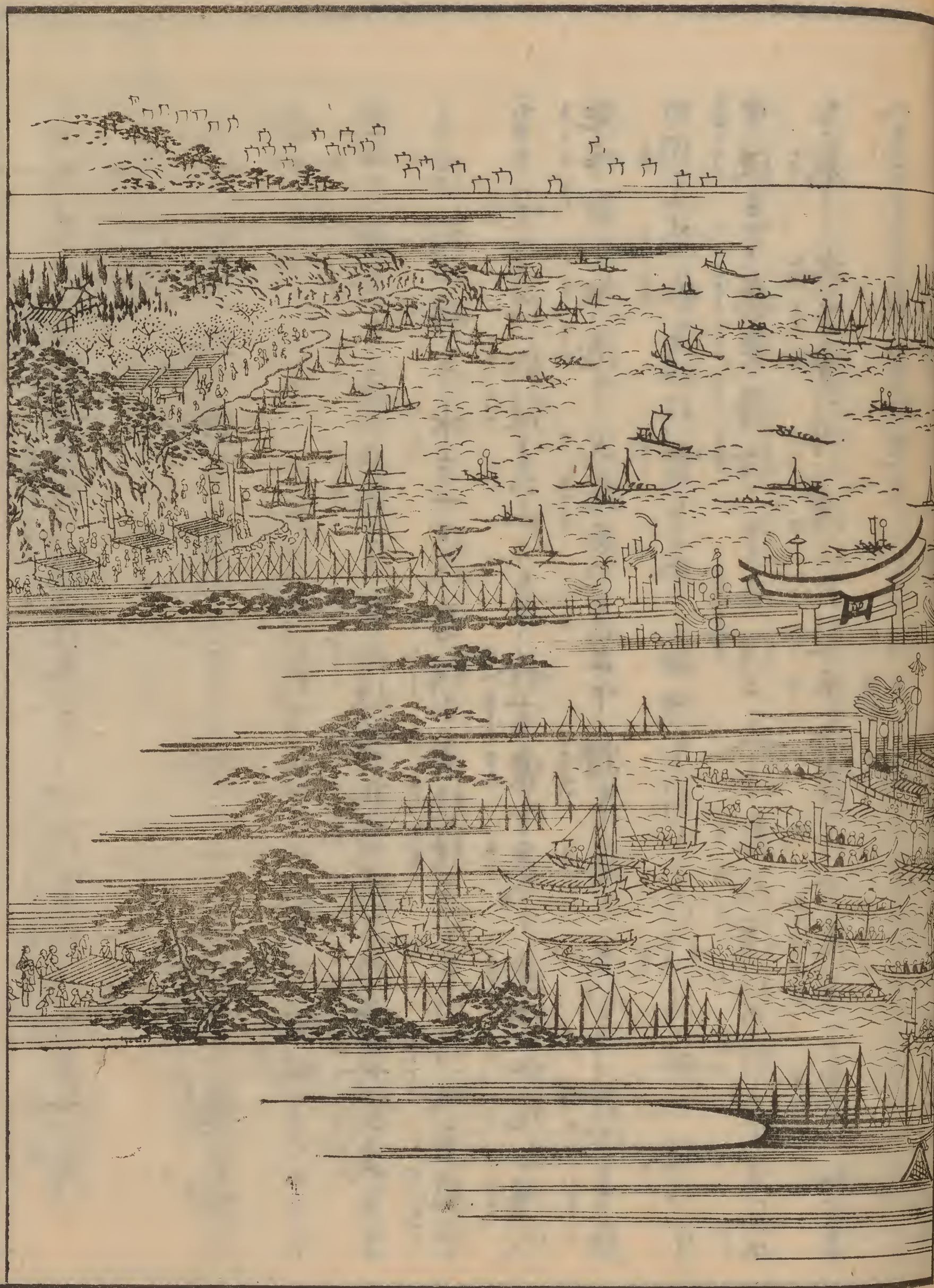




同夜海上  
光景









十七日夜船管絃

この日より十二日まで大宮之棟簀殿にて供養宸勝王經を讀誦次

十六日の夜湯船三艘を湯池にちり座をつゝ祢行きて藩を借ひ  
屋敷を借りはまゝの彩花燈籠を懸くこれを湯舟組といふ十七  
日申の尅大宮居の正面より衆出次諸祠官座主供僧各装束をな  
し湯船小候を水主十人烏帽子素袍袴にてその行次最嚴重  
なり曼を湯船にといふて伶官樂を奏し衆僧伽陀を唱へ  
地湯前より押送り大建石の多き燈を奉くそより外宮も居  
の内より湯船をいれ樂を奏し伽陀を引くその後湯船を廻し  
中流より奏樂讀經し長濱より一惠み須社の前よりまた樂  
を奏し大宮居の内一漕いれ乱声を奏し吉先并は客人社のま  
へありまた奏樂伽陀ありその後大元浦よりとも奏樂伽陀あり

て後湯船を湯池より一此この夜府下より湯供船とて百餘艘を  
つゝ湯船の行儀小随ひて進退を其粧ひ甚壯觀より古端等  
頭の畫次へきに次ねより二階屋敷船屋敷を作り金銀をち  
りハ免珠玉を飾り錦の上幕後の水幕紅紫水上も飾り燈花波  
る小漂ふ比しも六月の暑丸空ながら涼風徐に來りて美人甚を  
おえ次或ハ舳は碇ちり或ハ舳は棹さして祭儀を拜見せんと次  
るもの海上に充滿し船艦相衝り實に海西の大祭並社の  
勝りなり六月にあれは夏の十七夜神事にて管絃あり俗にこ  
れを居管絃といふ

七月

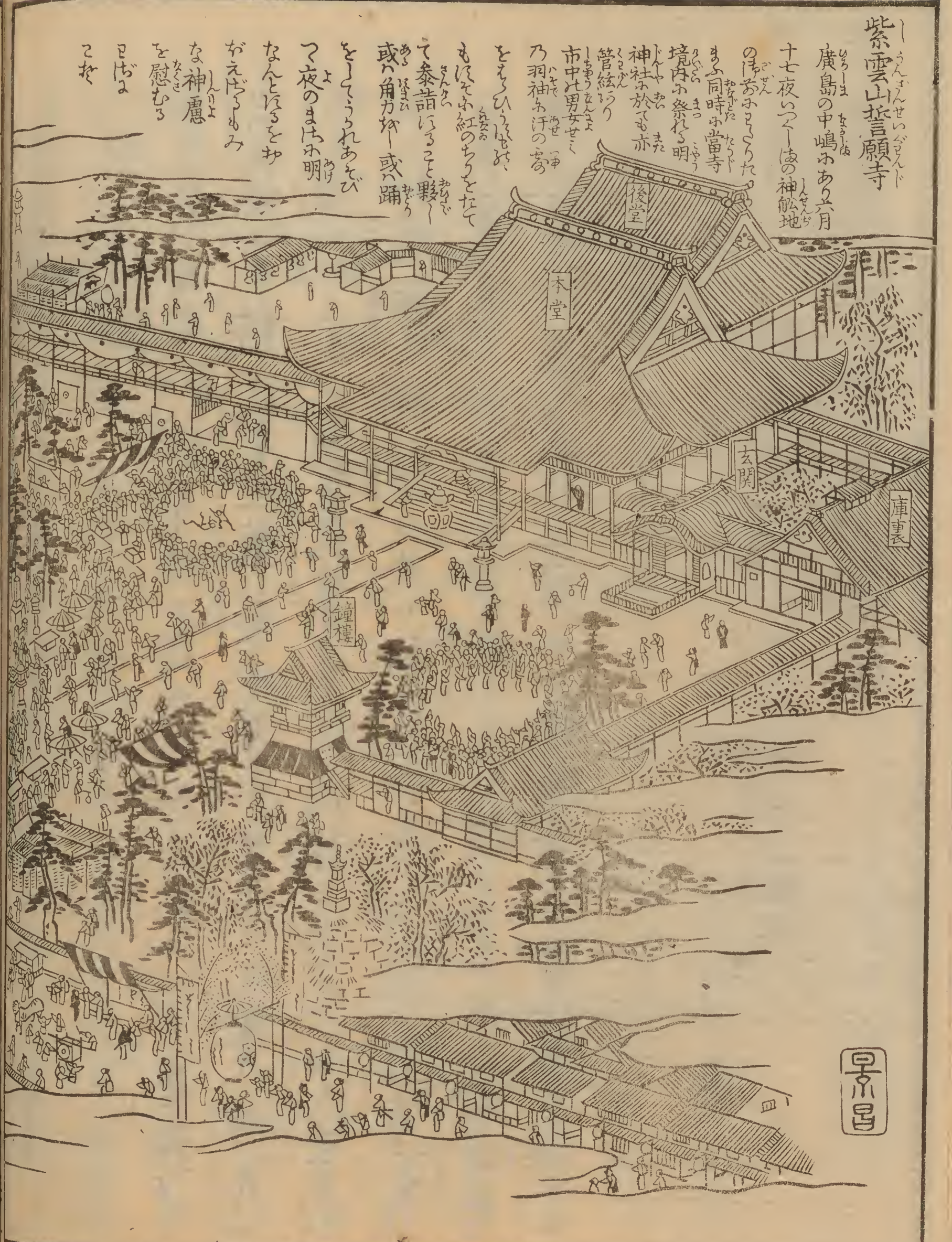
七月湯出子

これ日早曉大宮神前にて靈宝を晒次

同日両宮湯供

榊葉求子の舞あり







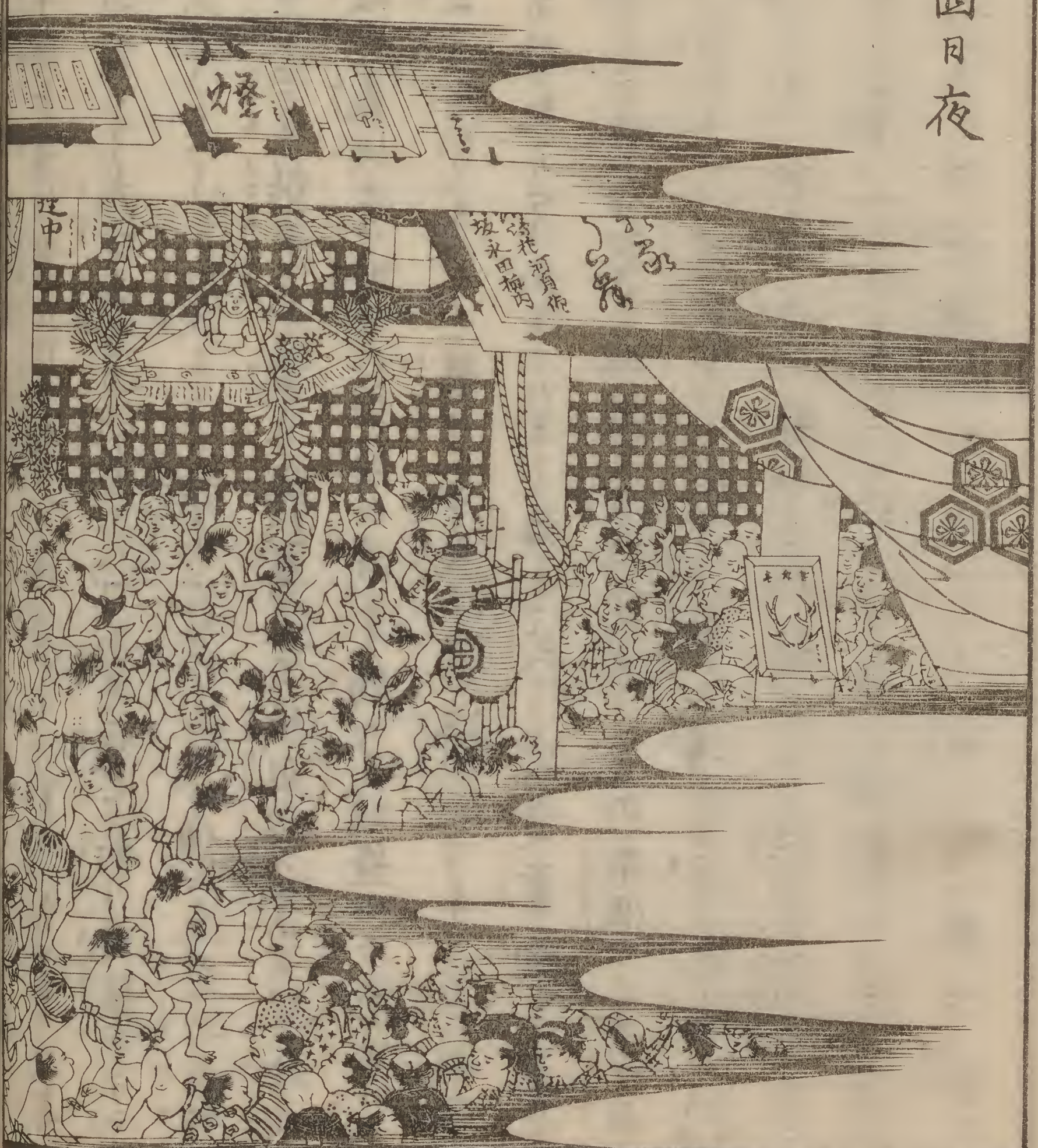
十四日夜延年祭

供僧伶人こくく出仕大宮三棟拜殿ふて是を行ふ五入四方の臺こ  
れを地盤といふ盤のうへに隅小梅松櫻の造り枝をたてに手切切け  
中ふ三尺余の本偶を装束美麗ふかばうれく像の大概福神の形  
よして毎年小異なり盤上は灯を挑げ拜殿のうへに釣りあはせて  
薄暮小至りて相番の鐘を鳴らせむ東西の両町より男子をな鰯  
大童小て西の方へ次ぎうへに揚観音堂の急東へ坂本山王の拜殿まで  
勢松一鯨音三度よるんでこれと大宮拜殿より三棟へ入る先驅二人素  
尅供僧廻廊ふ参着しその後また被殿より三棟へ入る先驅二人素  
袍袴侍帽子ふて地盤を杖うりこの地盤といふものへ長さ七尺余の  
角なる木を骨ふして麻の如く地紙を付たるものなりはて供僧六人  
袈裟を以て頭を包く開口を番ふまゝ左右行者の祈といふことあり

僧一人半衣を着け背中に手をうけ地盤の下に卧さしむ是を延年  
坊主といふかくて左方右方の行者一人づつ出て是を祈り地盤のうへ  
の人形ふのうへにむ次は六人猿楽といふことあり僧六人梨打烏帽  
子被着て玉手絃をきき謡ひ舞ふて被殿組入の内より伶人  
青海波を奏次この時々の鰯の者ども釣たる地盤の下にちり  
を爪をひき免る盤中を窺ふその探合ひう免く声殿閣  
廊臺ふひびたう山よこたまし海より入て雷霆震動竜も去り  
魄も消るかと賞申かくて地盤を下次とひうくこの本偶を奪ひ争  
ひ乃方声をうけて取合ふことなるは首を得るを以て先途と次  
の儀なりたかく取得る者も鰯をなれ隠次こと能はむ彼方へこと  
一とあるに奪はれ上ふまらび下ふ伏し或持て樓臺のうへに迹の不  
り或はうききて湯池の潮ふうかき漂ふたは一群右は二群もと合は



七月十四日夜  
延年祭



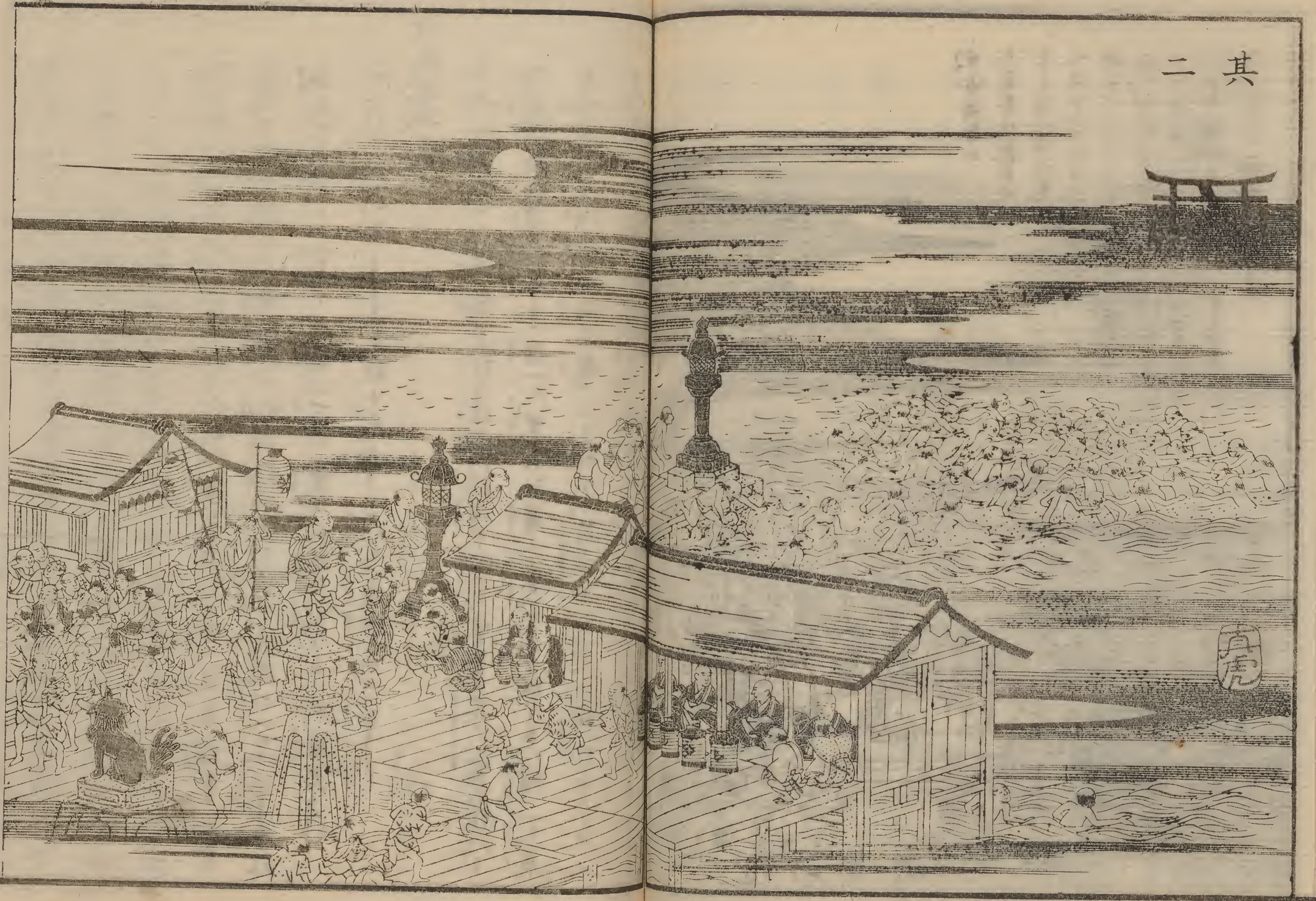
玄旨法印の  
九羽を記し  
てく天正十六年

七月十六日宮島神前まで

延年といふことありといへる見物として  
夜半をかり小舟をぬき下界とけり然れ  
とも社傳よりいへるより十日の夜だ  
るより當時十五日に行はしむるも  
ハ十日目より故障ありしや









彼是を疑へり終に佛首の事と傳へて定りぬき、東へ鎌倉居西へ次ぢ  
りひ揚りて大音声の佛首を得たりと名乗るありかくはるふどにう  
くく彩塗の粉地もまけて本地となり耳目の事のためなくいひ  
たつれば見苦しれものなれどもは佛首を得たる方ハ其年福ありとぞ  
またとづう得たる者ハ殊に佛の祝ひを去りて文政六年のまうに  
争ふと甚しとて十五歳以下の童子の外ハ出ること留るるに  
ふこねも競ひなりとて文政十年よりまたもとの如くふどなり

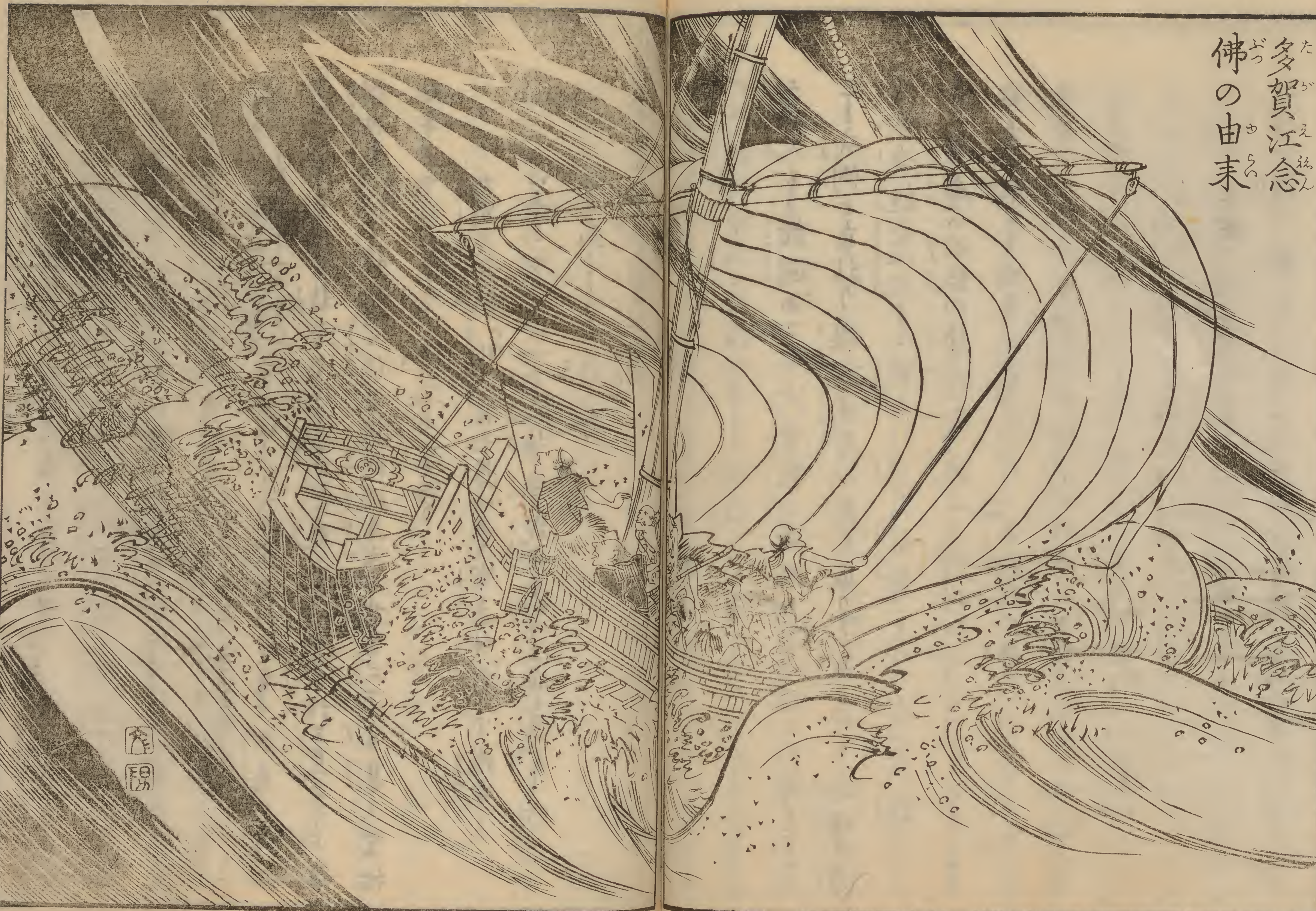
同夜延年舞

上件ハ載ちるの地盤をわら次と祀供僧とな大宮より客人宮の組入  
列座に供僧の内少き僧一人黒衣を着し素き帯袂ハ免頭ハ袈裟  
を以てて佛殿に向て舞ふまた一人笏拍子を取て朗詠をうたふ  
これを延年舞といふ香川南濱の秋長夜話ハこの事ハ記しむ

仁和寺佛の僧家の綱勢にて佛座なるが南都北嶺の大衆年頭  
の御祝儀申上るに佛のより御盃をたまふその時延年をまひ  
たる夫より諸國ふても大會執行の時をたう次この舞をまふ  
こと式例となれり遐齡延年の義を取りて名とせり文明の頃  
甘露寺親長に記も載られ注しハ乱舞とあり安宅の謡もと  
より弁慶ハ三塔の勇僧舞延年の時仁和寺といふもことなり  
安宅の能も延年に舞ありて一子相傳の舞ハあるよ一今冬  
絶勢と我今も南都真福寺甲州身延山などなこの舞あり  
嚴島ハ一つの頃よりこの事始りてん知く次恐くく仁和寺佛門  
主仁助法親王大聖院に住せたまひより始るなるべし云々とあ  
り田中芳樹が丹霞漫筆ハ南濱の説をひきて謡曲拾葉抄ハ  
いつるも曰ト然れども更ハ大寺の大會執行の時ハかきけること



多賀江念  
佛の由來





ふいあゝ東鑑卷二十建曆二年十一月十四日 中畧 繪合事負方畧

所課又已進遊女等是皆摸兒童之歌平文水于付紅葉菊花等各

野律盡曲此上堪若少類及延年云々また日比十一建長三年正

月九日政所問注所等勝負延年 勝負ハ雙六の所をびびるなり日三十五寛元二

申時申といひこれなり當時 年十月十三日の件ハ雙六者於侍者可被許くと見

子のためは愁を日次き年を延るといふよりねとまること庭

訓往來の件ハ詩歌管絃者遐齡延年之方也まて下学集ハ管絃

延年とつけたるなり思ふべしとあり

九州その記 玄音法 日七月十五日宮島神前にて延年と

いふとありといふ足物とて夜半をかりは舟をのりたり

のうみよとまりたり

十六日十七日両夜多賀江念佛

東町の後にてこれを行ふ相傳ふむう伊豫國北条の地頭多賀

江兵衛某といふ武士當國小乱入合戦せしことありその時兵

船をこの沖に繫しに折節神廟小舞踏ありしを見て多賀江

が兵はまぐの悪口をなげ放逸なりしと立安神罰ありて

風を波たち人船ともに沈没をそれより多賀江に幽魂をよと

ど海に渡海の船舶に障礙をあらうし其靈をなごめんがため七月

十六日多賀江の洲にて念佛供養を始しとぞ今ハ十六日十七日の両

夜僧俗百萬遍を行ふ

十八日洗

東西両町よりいで神殿廻廊を洗ふこれを洗洗といふ

八月

九月



九月西宮重陽湯供

十二月新嘗湯供

この日西宮に新穀を奉る是を秋來の湯供といふ諸祠宮内侍これを行ふ燎をたき舞樂あり和琴古笛を用ひ柵葉東遊永子を舞ふまた板頭還城あり

十日大宮祭

式三月十五日の如くこの日ハ菊花を奉るまた供饗一切經會を行ふ

十月

十一月

申日鎮座祭

この月初申の日は是を行ふ蓋一佛神の鎮座ありハ十一月十二日小て替の日壬申あり故この日を用ふといふ前月末の亥日よりけ日までの

十日のる島中八音を傳免祝師齋所小入て潔齋を替の餘當日の祭儀ハ二月初申と異なることなる後ハもら一但湯燈消といつることあり諸祠官出仕のう柵の舞ありて諸殿の湯燈を残す次消を暫くありて上に友人鎮坐靈秘の祭祠を脩をまた覆槽置といつことありそのをて國府属官明子の曲をうたふ畢りて湯燈を一度お挑く殊勝なることと人々物ありといふ

十二月

八日引声

この日より十二日まで供饗西宮に於て阿弥陀經を轉讀を

十七日法華會

客神宮經座屋に於て供饗法華經を轉讀を

廿五日湯衣繼

此夜より祝師柵守齋所小入り内侍をて翌年元旦に奉ることと後の新衣を繼いむ







晦日山伏

申の尅供僧座至大聖院たいやうみんに舎しやう一い餐夜まやうやの後戌うしの尅くに及およんで前驅ぜんぐ元げん素袍そほう袴はかま烏帽くわぼうをかき先さきに進しん中ちゆうに歩幣ふへいを押立おしだて螺貝らかいを吹ふ供僧くきやうはえふふ松明しょうめいを兼かねり大官たいくわんお殿でんは馳ちせまゐる馳驅ちくの名な松明しょうめい夜嵐よあらしふき散ちり家厨いへ草木くさきは觸ふるといいともその火掌ひうつで他たは極うつことなな一い故こをの餘燼よじんを取とり火災除くわさいじよの湯肴とうやくと次つぎ且かつまたけ夜よ島内しまうちう并なは府下ふしやうの衆しゆう参詣さんぎ一いお殿廻廊でんかいりやうは幔幕まんまくを赤あかい屏風ひやうぶを圍かこみ酒宴しゆえんをなな一い年籠としこもりといふを次つぎ○子の尅くの鐘かねひけいこくく退たい出しゅ一い々々若潮わかしう迎むかへいづるなり

日別供

日毎ひごとに洗米せんまいを両宮りやうぐう一い献けんト拜請はいしんの衆しゆうは賜たまふ

月次湯燈

毎月朔日えいげつ七日なな十五日じふご十八日じふはち廿六日にじふろく廿八日にじふはち神殿かみでん百八燈ひやくはちとう并な小廻廊せうかいりやう百八乃ひやくはちなり燈籠とうろうへ火ひを點ともすも一い奉納ほうなう阿彌あみは際時さいじも上あるなり

神鹿

補遺

當島たうしま小い一いへより鹿しかのねわく居をることい西行法師さいぎやうほうしの撰集抄せんしゆせうみ鹿しかをかくされを湯山とうせんのいを一い々ななとああるなりとも知しる



里道く

人お

たなま

床の音も

あそび終い

おれ

秋の

夕暮

岡田

清



二条陵  
關陵



リ獸類のうちにてことほぐ鹿をいふ故を世にうけ知る人なり大和の春日社にも鹿いとけち彼社にたてその神天児屋命ふまりて神代は天照大御神天のいそ戸ふこもふせたまひとて天の香山の鹿の肩骨杖拔て占合たまひ鹿トの故より起れるなり當島なるに然るふあふくむ仁徳天皇難波の高津の宮は天下知食る三十八年の七月皇后ともふ高臺ふのありてよなく暑さを避たまふ燦のちど免のそなれを免饑望の鹿のつまふも寥亮もたえてあられなり晦日ぐこなれるふ鹿のなるぬ夜ありけり何ゆゑよこよひの鹿のそ名のたえぬと天皇いふうおもちりるふ翌のあした猪名の縣の佐伯部芭苴をたてまつりいふなるものぞと膳夫ふといふたまへ鹿ありとぞ奏

いけるいづこの鹿ぞとのたまへを免饑望のありとぞ奏しける天皇叡慮ふねもちけく夜ごとふな起鹿のそ名一昨夕り絶より佐伯部が得たる日得たる望をたもふをたして朕が関つる鹿ふあを被り朕このぞう懷抱のある哉仰たる鹿のそ名を慰るるこつるふかき朕が愛するるを知らむといへどもなむ恨免起るこざりなといふく逆鱗ましくて當國淳田の郷は移つるたまひりこれ今の佐伯部の祖なりと日本紀はまゐりたまへり當島の祠官もまたこな佐伯氏なればたもふかの佐伯部の支流にて祖先の鹿ゆゑは移郷の罪ふあを懲て子孫ふこの獸を殺をなとかく誠を述つるゆゑたのつる當島ふ鹿のたふくなれるあはれべまた鹿を大明神のつうひたまふといひなるは



つごもりやまぐち  
晦日山伏





ハ鹿しかハもとより仙獸せんじうなり茸しやう茸えん山かかゝれ養やひ草くさを谷原やつがはらふえ  
るびつゝみてもまことよかきか蒼白さうはくの齡よひを保たもつべき所ところよりなへり  
されバ市し政ちやう裁なまき社しゃ壇だんふ眠ねりて往來ゆききの人ひとはたゞろろ大だい明めい  
神かみもその性せいの馴なれやまを免めんでたまふらんこれまゐよんぞ  
ろろなれやもあゝびいゝふに八年はつねんの三月さんげつ石見いそみの山やま濱はま  
田たより鹿しか一いち匹びつを檻かぎふに被おり来きたりりその添書そんしよふいふ  
蘇そ州しう宮みや島しまより明神めいじんの法使ほふしと申まうて當たう地ち瀬せ戸と嶋しま嚴いつしやう島しま  
社しゃへ鹿しかのまうでゆる往い古こより有これありも歸路きろは逆さかひの時ときを  
人ひとをもて杖つゑろろ一いち里り老らうの口くち傳でんもい(バ)け度このたびもその  
例れいはまかそゆとありて濱田はまた祇ぎ園えん社しゃの神かみ江本えほん宮みや内ない瀬せ戸とが  
一いちまの年とし寄より六む年ねんの連署れんしよなりうれい神かみのつゝいふとくち  
もうねろろろろふいあゝろろまや



